

傘

孤独を嗅ぎたくなったら

港町へおいで

駅では潮風がため息を包み込む

町は

八朔の木が艶やかな実をつけて

葉はその実を憂い 騒ぐ

君は実をひとつもいで

僕の飾り荷物に入れる

遠く手招く波を

プラットホームから望み

潮風を胸いっぱいに畳み込み

「これも土産だ」と笑うと

「帰るならもう来なくていいよ」

と君は微笑む

電話は嫌だ

渦に沈んでいくようで

手紙は嫌だ

カモメさえも恨むから

鞞した手を差し出して

この手が嫌いだからか

磯の香りが嫌いだからか
さらさらした髪の人を
待たせているのか と
君は呟くけれど
僕はプラットホームの上で
返事を波の音に頼ってしまう

電車のドアが開き
潮風が僕の背中を押す
やり過ぎそうか
波に荷物をあずけてしまおうか
駅長の訛り口調が
僕の思いを遮り
君は目を見ず
ドアが閉まるのを待つ

それから
僕は傘を捨てた
街が放つ淫靡な光
野卑な肉も骨も
全てを洗い流すように
雨に打たれた
パパ いつもびっしより
妻と子が笑う

雨上がりの午前四時
窓を開けて青山通りを見下ろせば
仄かにあの町のおいがする
芳醇なため息が
僕をこれでもかと狂わせる